

特別寄稿

私の尊敬する人

田中 玲子

(秋田栄養短期大学 教授)

大森町元町長、阿部勝行氏は、故山下太郎氏の遺族の寄付により「山下太郎顕彰育英会」を設立し、県内全域に給付対象を広げ人材育成に寄与するとともに、奨学生のOB会の設立を提案し、OBと現役奨学生の交流を促進したということで、10月26日に県文化功労者として表彰されることが発表された。

実は私は、平成6年に当会から「山下太郎地域文化奨励賞」を頂いたことがあるので、この記事を読み、早速育英会に駆けつけてお祝いを述べたのだが、雑談をしていくうちに、山下太郎氏は楠木正成の子孫であることを知り、二度驚いた。それは、私が歴史上の人物で一番尊敬している人は楠木正成だからである。

私のような昭和一桁生まれの人だったら誰でも知っている、文部省唱歌の楠木正成の歌がある。

『桜井の別れ』

へ青葉茂れる桜井の 里のわたりの夕まぐれ…

それから、皇居外苑に皇居の方を向いて馬にまたがり、大地を蹴ってそびえ立つ正成の像。この像は昭和19年発行の五銭札にも描かれている。

鎌倉時代の末期、執権の北条高時は遊興三昧の日々を送り、民は重税に苦しみ世の秩序は乱

れた。見兼ねた後醍醐天皇は幕府討伐を目指したが、幕府軍の強大な軍事力に恐れをなして討伐勢力に加わる者は少なかった。その時、後醍醐天皇を支えるため、駆け付けたのが楠木正成である。

有名な楠木正成「桜井の別れ」のシーンは映画にもなり、テレビドラマにも登場する。死を覚悟した正成は戦場の湊川に向かう途中、桜井で息子の正行（まさつら）と対面した。自分も父と一緒に戦うという正行に“故郷に帰るように”と命じ、さらに“たった一つの命を大切に、志を持って生きてゆけ。立派な大人になって己の生き方が見えてきた時にそなたの命を使えばよい”と諭し、今生の別れを告げている。

湊川の戦いは、甲冑に身を固めた幕府軍の多勢に無勢、兜も無く普段農民の上半身裸の者もいる。しかし正成は、智謀を尽くし策略をめぐらせ、一時は勝利を収める。が、そこで正成は壮絶な最期を遂げる。その最期は敵方の足利尊氏からも尊敬されたと言われている。

その後、家督を継いだ息子正行は、後醍醐天皇の次に即位した後村上天皇に忠誠を誓い、四条畷（しじょうなわて）の戦いに敗れ自刃したが、正行の忠誠ぶりには、敵将足利義詮も心を動かされ、自分が死んだら正行の隣に墓を建ててほしいと言いつつ残したという。

山下太郎は、楠木公10代目の楠木正具（ま

さとも)の孫が、現在の横手市大森町に土着して百姓になった後の子孫で25代目に当たる。その事を誇りとした太郎は、現在も活動をしている「楠木同族会」を発足させ、初代会長となり、楠木公が祀られる湊川神社へ大鳥居の寄進などを行っている。

山下太郎は、祖父であった太惣吉の養子となり秋田で10歳前後まで育った。実父母は東京に住んでいて、その後親元へ帰り慶応義塾普通部を卒業。彼は慶応出の坊ちゃんて容姿に自信があり、一流好みでお洒落が大好きであった。一方で、彼の言葉からは秋田訛りが抜けず「君」を「ちみ」と言い、「石」と「椅子」が聞き分けられなかったそうである。

その後太郎は、札幌農学校(現在の北海道大学)を卒業している。「Boys, be ambitious」を掲げた校舎は、白いペンキ塗りに赤い屋根、四角な煙突とバルコニー、庭は所々枝をはったエルムの大木等全てアメリカ風であり、クラーク大佐の故郷であるマサチューセッツ州の風景を漂わせ、異国情緒に溢れていた。これが彼の遠い国、外国への憧れを育てたのかもしれない。

同校を卒業後、道産品の飴やバターの改良を手掛けていたが、おかゆの鍋のふきこぼれが乾いて薄紙のようになっているのにヒントを得てオブラートの製法を発明し、オブラート会社を設立する。

その後アメリカの硫安の取引、穀物の取引、鉄鋼の海外貿易、ウラジオストックで鮭缶の買い占め、大正7年には外米の輸入等手がけ、日本国内で米騒動が発生した時には、上海米を調達している。そこで満州鉄道と関わり巨額の負債を負うが、やがて息を吹き返し、満州の事業は拡大、「満州太郎」と呼ばれるようになった。

太郎はその財産を基に、大正15年から終戦まで、20年間にわたり郷里の大森町に奨学金を寄付し続けたほか、昭和11年には故郷の秋田県大森町に山下学館を寄贈するなど、秋田県の為に尽くしてくれた。

戦後は日本の復興のため、石油資源の獲得に奔走。太郎の郷里秋田は石油の県である。太郎は子どもの頃からこの秋田の石油の事を聞かされることが多く、関心を持っていたのかもしれない。

第二次世界大戦で日本が敗れた理由はいくつかあるが、石油不足もその一つであった。秋田や新潟で石油が採れても日本全体の必要量の1%にも満たず、99%は外国から輸入しなければならない。“自分で石油を掘らなければ駄目だ。人のものを買っているだけでは、しょうがない”これが太郎の持論であった。

やがてアラビア、イラク等中東諸国で石油資源の権利取得を目指し、懇意であった丸善石油の社長と合弁で「日本輸出石油株式会社」を設立し社長となった。重役陣は、元官僚、大手会社の社長、政界人、財界人等が名を連ね、国家事業として政府の後押しも得ていたものの、当初予定されていた出資額が25億円から35億円に引き上げられると、足並みも乱れ始め、「砂漠の真ん中に石油を掘るなど、そんな夢のような話に出資などとても無い話だ」そのような様々な冷笑や中傷に取り囲まれながらの発足であった。

その後、出資も決まりようやく採掘の権利を手にした太郎は、開発事業の主体として「アラビア石油」を立ち上げたのだが、果たして石油が出るかどうかは実際に掘ってみなければ分からず、誰ひとり確信が持てるものはいなかった。

しかも、中東で石油を掘るには、様々な困難がある。アラビア・カフジ地方は、炎熱の砂漠で水が乏しく、交通や通信の便が悪い。さらには、採掘する場所は、陸上に比べて10倍も費用がかかる海中油田であった。

海中油田の掘削と言っても、古風な井戸掘りと同じである。先端にピットという「きり」を付けた鉄棒を下ろし、回転させながら地中に深く掘り下げていく。

試掘が始まり13日目、油層を通過したという知らせが入り、一同は喜びあった。その矢先、大きな事故が発生する。先端のピットを交換する作業中、突然穴の中から猛烈な勢いで土砂交じりの水とガスが噴出した。そのうちに、飛び出る石ころとぶつかって火花を発生し、天地を揺るがすような大音響と共に爆発した。火炎の高さは30メートルに達し、やぐらは真っ赤に焼けて海中に倒壊したのである。

火災そのものは、油がある証拠でもあったが、器材の焼失と補充のための費用と時間の損失が大きかった。

4か月の空白期間の後、掘進を再開して約1か月後、油層に届いたことが確認された。やがてこの井戸一本の産出量は、1日当たり1,000キロリットルで日本中の油井3,500本にあたるものになった。この結果に勇気づけられた太郎は、その後2号井、3号井、4号井、5号井と掘り進め、いずれも1日あたり1,000キロリットル以上の出油をみた。

そして昭和39年、「アラビア石油」は、設立以来6年に渡る欠損を埋め純利益28億円を計上、一割の初配当をした。この年、油井は50坑を数え、アラビア石油の目的であった1千万キロリットルの年間販売量をこえた。こ

れは実に日本の原油総輸入量の7分の1に相当するものであった。

同年夏、太郎は北海道大学から講演の依頼を受けた。76歳になっていた。太郎が在学した当時は、木造二階建ての粗末な校舎が、エルムの木陰にちらほら見えるだけであったが、今は立派なコンクリートの建物になっていた。

その後、太郎は心臓発作を起こし病床から会社の経営を指揮した。自宅が社長室になったが、昭和42年6月彼は息を引き取った。

その2年後、太郎の夫人文子さんが砂漠のカフジを訪問した。砂漠の中に立ち並ぶタンク、製油工場、倉庫、発電所、従業員のための社宅、病院、小学校、現地の人のための回教寺院、無人の広野に魔法のように人工都市が作り上げられていた。巨大なフレア・スタックは紺碧のアラビアの空に赤い炎をはきつづけていた。夫人は夫の偉業を目の当たりにし涙が溢れたという。

楠木正成とその子孫山下太郎は、生きた時代や職業は違えども、どちらも己の信念を貫き通した人物である。正成の主君のために命を賭した生き様は敵方からも尊敬を受け、今なお信仰を集めている。また、太郎も人並み外れた行動力と愛国心を持ち、日本の発展に尽力したことには頭が下がる思いである。

山下太郎の残した育英の精神に助けられ、また私の最も尊敬している楠木正成とつながっていたことに、何とも奇妙な縁を感じたのであった。

<参考文献>

杉森 久英 『アラビア太郎』 (2016)

講談社+α文庫